

一般の部

木島平米ブランド研究会会長賞

山賊風カレーライス

中島英三

おふくろ、元気になっているか。二週間に一度、施設に出向いてオンライン面会をしているけど、今日はその合間なので手紙を書くことにしたよ。

おふくろは百二歳。五十七年も前の話だから覚えているかわからんけどなあ。高校二年の夏、仲良しだった谷山君、橋本君、松本君の三人が実家に遊びに来たときのことだよ。

三人には、僕が遠方の出身で、始業時間に間に合わないため高校の近くに下宿をしていることが信じられなかったらしい。三人は「お前の実家はどんな所にあるんだ。そんなに辺鄙なら一度行ってみたい」と興味津々。

ある日、乗合路線バスで小一時間かけて三人がやって来た。おふくろは農作業で忙しいなか、食べ盛りの高校生を迎える昼食用に、田舎で手っ取り早く出来るカレーライスを大鍋にいっぱい作ってくれた。

当時、わが家のカレーライスはサバ缶にジャガイモ、ニンジン、玉ねぎ、ナス、カボチャなど季節の野菜を入れるのが定番だった。いずれの具材も乱切りの大きめ、ゴロゴロした感じだった。だが、この山賊風カレーライスの味が抜群で、僕たち四人はお代わりをして腹いっぱい食べたよ。

三人は、

「この家まで遠かったなあ」

「予想以上の山奥だったよ」

「山の中だから静かだと思っていたら、家のそばを流れる川の音が存外やかましいなあ」

などと遠慮のない感想を言い合いながら舌鼓を打っていた。

「大事な一人息子の大切な友だちに違いない。急な我儘でもきいてやりたい」

この一心で、おふくろは何も言わずに汗をかいてくれたのだろうと、そのとき僕は思っていた。でも、これまでずっと照れくさくて、おふくろにお礼を言っていなかったような気がする。

今さら遅すぎるんだけど、今度の面会時には、「あのときはホントにありがとう」って、忘れないようにお礼を言うよ。また顔を見に行くから元気でいてな。